

ドイツの子どもの本の体験話法について*

三 瓶 裕 文

1. はじめに

体験話法は、作中人物の思考や発言を再現する言語的手段の一つであるが、その言語的複雑さ、微妙な心理描写という観点からは、大人のための物語テキストに用いられるのが自然と考えられる⁽¹⁾。実際、就学前の子どもに読み聞かせるための物語では、作中人物の発言や思考の再現に体験話法が使われることは稀であり、もっぱら直接話法が用いられる⁽²⁾。しかし、少しく静かに考えてみれば、子ども向きの本においても、子どもの活動の場が家庭から学校、社会へと広がり、それとともに、人間関係も複雑さを増すにつれて、幼児期と異なり、思うこと、感じることをそのまま吐露するばかりでなく、部分的に捨象したり、心中ひそかに思うにとどめたりするなど、複雑な心理の陰翳がたくみにテキストに織り込まれること、すなわち体験話法の使用が無理なく想定される。

本稿の目的は、この直感的な想定を出発点として、子どもの本、わけても聞き手の知識の付度を前提とする定表現（人称代名詞、定冠詞など）を修得しつつある年齢の子ども向けの本には、大人向けの小説と同様に体験話法が用いられていることを観察するとともに、読者に及ぼす作用、翻訳の大筋を探ることにある⁽³⁾。言うまでもなく、子どもの本は、その対象年齢、作者、時代⁽⁴⁾により多種多様な作品があるが、紙幅の都合で Gudrun Pausewang, Ursula Wölfel, Erich Kästner などの作品のごく一部を分析の素材とするにとどめる。ただ、翻訳の観点から、ドイツ語に対する日本語の特徴の一つである「男女のことばの差」を見るために、大人向きの作品も補助的に観察する。なお、体験話法の文法的特徴と機能を浮き彫りにするための下地として、間接話法と（自由）直接話法（＝内的独白）の特徴と機能を確認するが、間接話法の例が特に子供向けの本には少ないので⁽⁵⁾、新聞記事も援用する。

もとより、包括的・詳細な記述を目指すものではない。今後の「60年代後半以降の子どもの本の体験話法」、「体験話法の日独語対照研究」のための端緒として、子ども

の本の体験話法の働き・翻訳のごく基本的な構図を素描できれば、それでよしとしなければならない。

2. 体験話法の文法的特徴と機能

2. 1. 理論的基盤

体験話法研究における金字塔にもたえられるべき文献としては Steinberg (1971) がある。またこれに先立つ研究として Herdin (1905) が、続くものとして Fludernik (1993) がある。また日本ではこれらの研究を踏まえて保坂 (1985 他)、鈴木 (1992 他)、神田 (2004) が、多岐にわたるテキストを素材に包括的かつ精緻な研究をそれぞれの立場で発展させている。本稿も基本的にこれら先行研究の成果に多くを負っている。ただ、体験話法使用の意図・読者に及ぼす作用に関しては、三瓶 (1996a)、Mikame (1996b) などで提示した「語り手の視点と作中人物の間の心的距離、直接知覚、共感 (共体験)、聞き手 (読者) の視点誘導、地の文との間の時制の無段差」を原理的基盤とする。理論的詳細には立入らないが、端的に言えば、語り手の基準点 (Origo) と作中人物の間には段階的なスカーラ (Skala) が存在し、このスカーラ上を、語り手の視点がいわば行き来するわけで、作中人物との心的距離の遠近に応じて表現の変異形 (Variante) が存在することになる。これが、体験話法にさまざまな表現上のヴァリエーションが存在する理由の解明のための決定的な糸口となる。また、本来、作中世界からの「距離があること (Distanziertheit)」の反映である「語りの時制 (erzählende Tempora)」であるが⁽⁶⁾、読者の側から見れば、体験話法は地の文との「時制の段差がない」がために、地の文を読んでいるうちに、思わず知らず作中世界に没入することになる。このように、体験話法では地の文との時制の段差がないことも、直示詞と同様に、読者をして作中世界に引き込むための方略の一つであることを主に三瓶 (1996a) において示した。ドイツの子どもの本を主な対象とする本稿も基本的に同じ路線にある。

2. 2. 直接話法、間接話法、地の文⁽⁷⁾

2. 2. 1. 直接話法

直接話法においては、定義上、作中人物の発言・思考が「直接」、すなわち、語り手による介入も「編集」⁽⁸⁾もなく、そのまま (unverändert) 再現される。破格 (abweichend) な文構造、心態詞 (ja, doch など)、感嘆詞、方言、作中人物の音調など、そ

のまま繰り返される。

- (1) *Nein, dachte Nina, ein Engel ist das nicht. So sprechen Engel nicht.*
(Pausewang, Gott : 104)⁽⁹⁾
- (2) „*Wäre ich nur schon dort !*“ dachte Peter. (Wölfel, Rächer : 25)
- (3) Johnny blickte forschend in die Stadt hinunter. Er dachte: *Unter jedem Dach leben Menschen. Und wie viele Dächer gibt's in einer Stadt ! Und wie viele Städte gibt's in unserm Land ! ...* (Kästner, Klassenzimmer : 86)
- (4) *Hat sie Bauchschmerzen ?* dachte er. (Kästner, Pünktchen : 9)
- (5) „Also, was ist mit dem Anton?“ „*In der Rechenstunde eingeschlafen ist er*“, erzählte Pünktchen. (Kästner, Pünktchen : 80)

2. 2. 2. 間接話法

これに対し間接話法では、元の発言・思考が語り手の視点から「編集」されるので、以下のように語り手の立場・視点から一連の操作が行われるのが典型的⁽¹⁰⁾である。

1. 人称の変換 (1 人称→3 人称)
2. 法の変換 (直説法→接続法)
3. 直示表現の変換 (hier → dort など)
4. 主観性の反映としての破格構文や有標の語順⁽¹¹⁾をそれぞれ無標の構文、無標の語順に変換

例えば例文(5)は、有標度の高い語順であり、強い感情が含意される。しかし、このままの語順では間接話法に取り込まれず、無標の語順に編集される。裏返して言えば、間接話法では、感情が濾過され、平静・中立・客観という弱い心的態度になる。

- (6) a. *Pünktchen erzählte, *in der Rechenstunde eingeschlafen sei er*.
b. Pünktchen erzählte, *er sei in der Rechenstunde eingeschlafen*.

5. 心理・感情発露の表現、例えば心態詞、方言、感嘆文、破格構文などの口語表現の非再現：心理・感情の濾過
6. 作中人物の音調でなく、語り手の音調

煎じ詰めれば、間接話法は、「語り手の視点、心理・感情の濾過、弱心的態度 (= 中立・客観)」と特徴付けられよう。中立・客観という特性から予想されるように、間接

話法は、まずは新聞・雑誌というテキストの種類 (Textsorte) に適した話法である。次の新聞記事において、書き手は三人の政治家、Schröder, Stoiber, Kohl のいずれからも等距離を保ちながら一人一人の発言を連続的に引用している。接続法を用いた「伝達詞欠如の (Einführungslose) 間接話法」⁽¹²⁾ である。

- (7) *Den deutschen Autofahrern seien keine weiteren Belastungen zuzumuten, sagte Schröder. Besonders Pendler [...] würden durch eine Vignette belastet. Der Straßenbau müsse wie bisher aus dem allgemeinen Steueraufkommen finanziert werden.* Stoiber wies dies als „unglaublich“ zurück. *Schröder habe erst vor kurzem eine Erhöhung der Mineralölsteuer [...] angekündigt. [...] Auch Bundeskanzler Helmut Kohl (CDU) hat sich in die Debatte eingeschaltet. [...]. Einerseits sei den Autofahrern keine weitere Belastung zuzumuten. [...].* (Bietigheimer Zeitung, 23. 7. 1998)

次の例でも記者は、発言者である Der 38-Jährige から距離を置いていることが察せられよう。

- (8) Mit 231 statt der erlaubten 100 Stundenkilometer ist ein Autofahrer der Verkehrspolizei auf der A7 bei Oberthulba (Lkr. Bad Kissingen) ins Netz gegangen. Der 38-Jährige aus Kassel, [...], gab an, *er sei auf dem Weg zum Flughafen München. Wegen seiner bevorstehenden Urlaubsreise habe er es besonders eilig.* (Passauer Neue Presse, 29. Juli 2004)

次は Kästner の Pünktchen und Anton「点子ちゃんとアントン」中の部分テキストである。やはり語り手の作中人物の発言に対する中立的態度、もっと言えば作中人物である点子ちゃんの母親とは意見を異にすることが間接話法の使用理由となっている。

- (9) Ihr Vater, der Herr Pogge, war Direktor einer Spazierstockfabrik. Er (= Pünktchens Vater) verdiente viel Geld, und viel zu tun hatte er auch. Seine Frau, Pünktchens Mutter, war allerdings anderer Meinung. Sie fand, *er verdiene viel zuwenig Geld und arbeite viel zuviel.*
(Kästner Pünktchen: 10)

以下のテキストは、主人公であり語り手でもある 14 歳の少女ユーリアの「日記」である。子どもが親の発言を引用するには、家族内、心的近さの反映として接続法でな

く直説法が普通であろう。しかし、親から心的に距離を置いた子どもの場合はどうか。ユーリアの両親は離婚している。そして、ユーリアは全篇を通じて離婚した両親を、冷静に、時には冷笑的に描写している。そのような「距離を置いた (distanziert) 心的態度」には「距離があること (Distanziertheit)」を含意する接続法が適する。直説法ではない。

(10) Dienstag, 15. Juli

Ich habe am Vater-Mutter-Kind-Frühstück teilgenommen. Die Mutti hat den Papa aufgezogen. *Es sei unheimlich nett von ihm*, hat sie gesagt, *dass er ihr als Urlaubsüberraschung eine liebe, alte Freundin beschere*. Der Papa hat erklärt, *er könne nichts dafür ! Die Windisch habe sich ihm aufgedrängt !* Da wurde die Mutti sauer und fauchte, *der Papa sei ein Macho und möge gefälligst nicht so mies-fies-hinterhältig über Frauen reden*. (Nöstlinger, Oh, du Hölle!: 205)

以上、「典型的な」間接話法を見てきたが、ここで指摘すべきは、語り手が視点を作中人物寄りに動かした場合、直接(話法)性が増し、その反比例で2~6に挙げた操作や心理・感情の濾過が漸減し、部分的なものにとどまるということである。すなわち、作中人物の視点からの直示表現、心態詞、破格構文、有標の語順などが間接話法でもそのまま取り込まれて再現されることがある。先取りして言えば、体験話法に近づくのである。例文(11)である。

- (11) ①Er erzählte ihnen, *daß er ihren Rektor, den Oberstudiendirektor Prof. Dr. Grünkern, gut kenne*. ②Und wie es ihm gehe. ③Und hier oben sei nicht viel zu sehen. ④Denn der Himmel sei ja unsichtbar. ⑤Und fotografieren dürften sie auch nicht. (Kästner, Klassenzimmer : 26)

①は人称変換、接続法、従属文性など、典型的間接話法、②以降、「伝達詞欠如の間接話法 (Einführungslose Indirekte Rede)」が続くが、③作中人物の視点からの直示詞 hier, ④心態詞 ja の主体が作中人物であること、⑤不定形が文頭という有標の語順などから、語り手が作中人物に視点を徐々に近づけていることがわかる。

次例では、視点がスカーラ上のどこにあるかにより、時の副詞が使い分けられている。

- (12) ①Dann sagte er ihr, er komme *morgen* wieder — ②denn *am nächsten Tag* hatte er Ausgang —, und rannte den weiten Weg zurück. (Kästner, Klassenzimmer : 74)

①では、語り手は視点を作中人物 *er* に近づけ、作中人物の視点からの直示詞 *morgen* を用いている。②では、語り手の視点はスカーラ上を作中人物から離れ、語り手としての視点から *am nächsten Tag* を用いている、すなわち地の文である。

以上、直接話法、間接話法の特徴を素描したことになる。語り手の視点が作中人物への距離のありようにより基準点と作中人物を結ぶスカーラ上を動かため、地の文と同じく語り手の視点からの典型的間接話法から作中人物寄り、すなわち体験話法に近い間接話法までさまざまな変異形 (Variante) が存在することを例証した。

2. 3. 体験話法

語り手の視点がスカーラ上をさらに作中人物に近づくと、体験話法となる。典型的特徴をかいつまんで挙げる。また地の文との関係を随時添える。

1. 語り手の視点から人称は変換⁽¹³⁾ [地の文と同じ人称]。
2. 発言・思考動詞 (sagen, denken など) によって先導されない、つまり伝達詞欠如 (einführungslos) であり、従属文でなく独立文。語り手の介入なし [地の文との間に垣根なし]。
3. 直説法 (但し「想定される直接話法からそのまま保存された接続法を除いて」⁽¹⁴⁾) [地の文と同じ法]。
4. 時制は地の文と同じ (典型的には「語りの時制 (erzählende Tempora⁽¹⁵⁾)」) [地の文との段差なし]。
5. 想定される元の発話・思考は上記の操作以外はそのまま再現される⁽¹⁶⁾、心理・感情の濾過がない。直示表現もそのまま再現される。すなわち作中人物の視点に合わせた直示詞が用いられる (⇒読者の視点を作中世界・作中人物に誘導・接近させる)。

5. の「想定される元の発話・思考は上記の操作以外はそのまま再現される、心理・感情の濾過がない」ということは、体験話法の解釈さらには翻訳という実際の観点からも重要である。思い切り割り切って言えば、体験話法の解釈に際しては、まず想定される元の思考に戻す、つまり直接話法に戻し、次いで、語り手の視点のありように

応じて距離のあること (Distanziertheit) をも考慮することになる。

体験話法は、語り手が自分の視点を保持しながらも、作中人物に接近し、あたかも作中人物の視点からのように、すなわち作中人物と「共に」作中世界を描写する。体験話法が間接話法と(自由)直接話法の中間的話法、二重の声 (dual voice)⁽¹⁷⁾ と言われる所以である。これは、体験話法にも、自由直接話法に近いくらい作中人物べったりの視点の場合と、若干の距離、間接性を内包する視点の場合を両極とするさまざまな変異形 (Variante) が存在することを示唆する。

また1から5は「体験話法が読者に及ぼす影響」をも根底にあって統率する。

(1) 体験話法部と地の文の間に段差がなく、

(2) 作中人物の視点からの直示詞により作中世界・作中人物へと導かれるので、読者は地の文を読んでいるつもりが思わず知らずに視点上、作中人物に寄り添うことになり、作中人物の意識・思考を共に体験することになるのである。すなわち語り手が体験話法を用いることで、読者の視点も作中人物に接近、作中人物の意識・心理を共同体験することになる。いわば語り手、読者、作中人物の視点の三位一体化である⁽¹⁸⁾。

以下、事例の観察を積み重ねることで、主にこれまでの研究に基づき述べてきた体験話法の諸特徴に具体的な裏づけを与えるとともに精密化を試みる。

例(13)の主たる関心は、体験話法中の人称代名詞の先行詞を特定するには、想定される元の思考を考えると、すなわち直接話法に戻すことが有効という点にある。

親に見捨てられ施設にいる赤毛の少年ペーターは、既に定年退職したかつての教師を慕って無断で施設の自転車を借りて、かつての教師の家に向かう。自分の目立つ赤毛のために発見されて施設に連れ戻されることを恐れるペーターは、ちょうど農作業中の男の帽子が車の上においてあるのを見て……

- (13) ①Er (=Peter) fuhr weiter nach Süden. ②Ob die Polizei schon wußte, daß er ausgerissen war? ③Plötzlich schwitzte er. ④Vielleicht hatten ihn die Kinder im Dorf schon erkannt? ⑤Man würde ihn schnappen und zurückbringen. ⑥Eine Mütze mußte er haben, keiner durfte seine roten Haare sehen. ⑦Dort arbeitete ein Bauer, seine Mütze lag auf dem Wagen. ⑧Der Mann bückte sich gerade. ⑨Sollte er —? ⑩Es würde ganz leicht sein. ⑪Oder sollte er nicht? ⑫Peter seufzte, hielt an, zerrte sein Hemd über den Kopf und schlang es wie einen Turban über die roten Haare. (Wölfel,

Rächer: 22f.)

①地の文。②破格 (abweichend) な文構造, 体験話法。想定される元の思考は Ob die Polizei schon weiß, daß ich ausgerissen bin? ③地の文。④Vielleicht の主体は作中人物ペーターである。語り手ではない。想定される元の思考は Vielleicht haben mich die Kinder im Dorf schon erkannt? ⑤未来・推量の助動詞 werden には, 直説法過去形がないので接続法 2 式 würde を代用したもの。形は接続法 2 式だが, 機能は「直説法過去」である。このような würde は体験話法の文法的特徴の一つとなっている⁽¹⁹⁾。想定される元の思考は Man wird mich schnappen und zurückbringen. ⑥目的語先置の有標の語順, 体験話法。最初の定形に直説法・過去でなく, 接続法 2 式が使われているのは, 元の思考で「婉曲」のために使われている接続法 2 式を引き継いだためであろう。想定される元の思考は Eine Mütze müßte ich haben, keiner darf meine roten Haare sehen. ⑦地の文ともとれるが, Dort の先行詞が先行文脈に明示されてないことから, Dort は文脈指示でなく, 現場直示であり, 外界知覚の体験話法と捉える。想定される元の思考は, Dort arbeitet ein Bauer, seine Mütze liegt auf dem Wagen. となろう。⑧文脈と gerade から, 語り手が視点を作中人物に近づけて, 作中世界を共に知覚・体験する体験話法「ちょうど身をかがめたぞ」。⑨, ⑩の er の指示対象は何であろうか? ⑨, ⑩を仮に地の文ととると, 文脈指示 (Anaphorische Referenz) で表面上の解釈は農夫となってしまう。先行文脈との連関性, 独立文の語順, 直説法過去 (接続法の解釈は無理がある) などから⑨, ⑩はペーターの思考を再現する体験話法, 指示対象はペーターと認定される。想定される元の思考は⑨ Soll ich —? ⑩Oder soll ich nicht? となろう。⑪形は接続法 2 式だが, 機能は「直説法過去」の würde なので体験話法。想定される元の思考は Es wird ganz leicht sein. ⑨から⑪は体験話法だからこそ, 外からは窺い知れない作中人物の内心の葛藤を描けるわけで, 読者も, 地の文との間の「段差」がないので, 思わず知らずに作中人物の内心を共体験できることになる。⑫地の文。迷った末に結局ペーターは農夫の帽子を盗まずにシャツを頭に巻いて赤毛を隠すことになった。

次のテキストでは, 八歳の女の子 Nina が, 車に轢かれて瀕死状態の母猫を前にして何とか救おうと思うが ……

- (14) ①Nur der Gärtner mit dem Schnurrbart lachte. ②Was ist das für ein Mensch, dachte Nina. ③Vor seinen Augen schreit jemand vor Schmerzen und stirbt — und er lacht! ④Die Gelbweiße schrie nicht mehr so laut. ⑤Sie

versuchte auch nicht mehr, zu ihrem Jungen zu kommen. ⑥Sie legte sich auf die Seite und jammerte. ⑦*Vielleicht — vielleicht erholt sie sich doch noch?* ⑧„Du, Gott“, sagte Nina und schaute nicht hinauf, „ich geb dir noch eine letzte Chance. [...]“. (Pausewang, Gott: 18f.)

①地の文。②「思考」の再現の直接話法、引用符はない。想定される元の思考に忠実に翻訳すべきだろう⁽²⁰⁾：なんて人なの、この人ったら。③前文に伝達詞による導入文 *dachte Nina.* はあるが、自由直接話法（内的独白）と捉えられる。やはり、想定される元の思考に忠実に訳すべきであろう：目の前で誰かが痛さのあまり叫んで、そして死にそうなのに — それなのに笑うなんて！ ④から⑥は語り手の立場からの地の文。ただし⑤の *kommen* は直示動詞であり、語り手が母猫に視点を近づけていることの言語的反映である⁽²¹⁾。⑦だんだん弱まっていく母猫を間近に見つつも Nina は心の中で最後の希望を思う。話法の副詞 *Vielleicht*, 心態詞 *doch* の思考の主体は Nina である。定形は直説法過去であり典型的体験話法。自由直接話法と異なり作中人物べったりでなく若干の距離を置いた (*distanziert*) 訳がよいであろう：もしかしたら、もしかしたらやっぱり直るかもしれない？ ⑧「発言」の直接話法。「女の子ことば」で翻訳が自然だろう：「ねえ、神様、もう一度最後のチャンスをあげるわ」と Nina は言った。

次のテキストでは、直示詞が多く使われている。読者を作中世界に引き込むための方略 (Strategie) の一つである⁽²²⁾。

- (15) ①Bis hierher war der Weg nach Polen Ninas Schulweg gewesen. ②*Dort drüben stand das große Schulgebäude.* ③Den Brunnen kannte Nina gut. ④Aber Franz hatte sie noch nie gesehen. ⑤*Der kam wohl nur nachmittags hierher.* ⑥*Und vielleicht musizierte er ja auch jeden Tag woanders.* (Pausewang, Gott: 59)

①は地の文。語り手は、まず場所の直示詞 *hierher* により、読者の視点を作中世界の *hierher* で指示される地点に誘導している。その結果②では、読者はその地点に、作中人物と共に立って、向こうに (*Dort drüben*) 学校の建物を眺めているかのような気にさせられる。外界知覚の体験話法と捉えられる。③、④では、*Aber* を介して対格目的語がそれぞれ文頭に置かれている。有標の語順、有標の文強勢 (*Satzakzent*) で、「対照」である。地の文と考えられるが、作中人物が心の中でいろいろと考えてい

ることの描写として、体験話法に近い。⑤、⑥時制こそ作中人物から距離を置いている語りの時制だが、そのほかは想定される元の思考がそのまま繰り返されている、典型的体験話法。想定される元の思考は

⑤← *Der kommt wohl nur nachmittags hierher.*

⑥← *Und vielleicht musiziert er ja auch jeden Tag woanders.*

⑤は、つい先ほどまで一緒にいた老人 Franz のことを回想している。Franz は作中人物の心的空間内に存在する焦点なので、人称代名詞 *er* でなく、直示の指示代名詞 *Der* 「あの」によって強く指示されている⁽²³⁾。wohl の主体は作中人物 Nina。また直示詞 *hierher* の使用に、語り手の作中人物への視点の接近が見て取れる。自由直接話法（内的独白）に近い体験話法なので、想定される元の思考に忠実な翻訳が良いと思う：あの人はたぶん午後だけしかここには来ないんだ。⑥話法の副詞 *vielleicht*、心態詞 *ja*、いずれも主体は Nina である。人称代名詞 *er* は、既知性を持つので日本語の翻訳にはゼロ代名詞が適切であろう：それに毎日違うところで演奏しているのかもしれないし。

本節で残された紙幅の範囲で、体験話法のその他の特徴的、興味深い構文を挙げる。副文の語順のまま、副文が独立的に使われる体験話法は珍しくない。

Nina は、母猫を亡くした子猫 Soso を家に連れ帰ろうとしたが、母親が受け入れてくれないので、子猫を連れて家を出た。そしてある外国人一家に子猫ともども暖かく迎え入れられた。

(16) ①Aber sie (=Nina) beeilte sich, so sehr sie konnte. ②*Was die da draußen wohl mit Soso machten ? [...]* Nina strahlte: ③*Wie gut Soso es hier hatte ! [...]* ④Nina zog die knallgelbe Hose an. ⑤*Wie schön sie war ! So ganz anders.* ⑥Mama schob Kinder und Puppenwagen samt Soso aus dem Badezimmer. ⑦Die Tür ging zu und im Bad rauschte es. ⑧*Jetzt wusch sie wohl die schmutzigen Sachen im Waschbecken.* (Pausewang, Gott : 71f.)

②、③、④いずれも副文が独立的に用いられている体験話法である。②は *Nina dachte, was die da draußen wohl mit Soso machten ?* という間接疑問文から導入文が省かれたと考えられる。間接疑問文の語順を残した、間接話法に近い体験話法と捉えられよう。主文形式で、*Was machten die da draußen wohl mit Soso ?* であったら、自由直接話法⁽²⁴⁾に近い体験話法となろう。⑧独立文形式の典型的体験話法。語り手の視点が作中人物 Nina に近づいて、Nina の思考をいわば共に体験している：

今ママはきっと汚れ物を浴槽で洗っているんだ。

Nina は、この居心地のいい外国人家庭で、子猫 Soso を預かってくれるという申し出を受けて、嬉しくなりいろいろと想像をめぐらす。体験話法が予想される。実際、体験話法により Nina の思考が再現されるが、語り手はさらに究極まで Nina に近づき自由直接話法を織り込む。

- (17) ①Soso hier lassen? ②Nina überlegte. ③Hier würde er es wirklich gut haben. ④Welcher Kater hat schon einen Puppenwagen zum Schlafen? ⑤Und wenn Soso hier bleiben durfte, dann konnte sie ja auch heim. ⑥Dann war ja alles gut! ⑦Aber noch ehe sie sich zu dem Vorschlag geäußert hatte, sprang Tam auf, rannte zum Puppenwagen, schnappte sich Soso und kam mit ihm zum Tisch zurück. Er wollte mit Soso schmusen, aber der wollte nicht.
(Pausewang, Gott: 80)

①自由直接話法と捉えられる。②überlegte により読者にこれから Nina の思考・意識の流れが続くことが予告される。③直示語 Hier, würde により、体験話法とわかる。繰り返しになるが、würde は、未来・推量の werden には、直説法過去形が存在しないがために、接続法 2 式を代用している。つまり形は接続法でも機能は直説法過去というわけである。④典型的体験話法なら定形は hatte であろう。自由直接話法である。「反語」という強い感情が体験話法よりもより直接的に吐露されていると察せられる。⑤, ⑥, 語り手はスカーラ上を Nina から少し離れ、体験話法を用いる。「意識の流れ」の先行文脈、さらには場所の直示詞 hier, 心態詞 ja, 感嘆符など、体験話法による Nina の意識の表出である。⑧語り手は作中人物から離れて、巨視的・客観的に作中世界を描写する地の文。

次のテキストは、アンチ・メルヒェンの代表的作家の一人である Ursula Wölfel の作品 Joschis Garten から、主人公の少年 Joschi と母親の対話である。母親が出張で三日間留守にする間、Joschi は、近所の Brasnik 夫人の世話になることになっていたが、出張当日の朝、Joschi は、突然、級友の家に泊まりたいと言い出す。出発直前のあわただしい中、二人の発言の再現は、「体験話法」と「伝達詞（言う、思う、など）欠如の間接話法（Einführungslose Indirekte Rede）」の使用により、伝達詞に中断されることなく、速いテンポで進められる。さて、(18)は、1965 年初版の 1972 年重版であるが、(19)は作者自身によって 1997 年に改訂された版である。私達の関心にとって重要な変更点は、接続法 1 式から 2 式への変更 (wolle→würde) である。

(18) 1972 年版 (1965 年初版)

- ①Am Dienstagmorgen dann, in den letzten, unruhigen Minuten des Aufbruchs, fragte er, *ob er nicht bei einem Schulfreund wohnen dürfe?*
- ②*Bei einem in der Mörikestraße?*
- ③*Nein, das sei jetzt nicht mehr zu verabreden.*
- ④*Aber er möchte doch so gern!*
- ⑤*Und Frau Brasnik?*
- ⑥*Mit der wolle er schon reden.*
- ⑦*Unmöglich. Sie sei bestimmt beleidigt.*

(Wölfel, 1972 : Garten : 56f.)

(19) 1997 年版

- ①Am Dienstagmorgen dann, in den letzten, unruhigen Minuten, ehe die Mutter fortmusste, fragte Joschi, *ob er nicht bei einem Schulfreund wohnen dürfe?*
- ②*Bei einem in der Mörikestraße?*
- ③*Nein, das sei jetzt nicht mehr zu verabreden.*
- ④*Aber er möchte doch so gern!*
- ⑤*Und Frau Brasnik?*
- ⑥*Mit der würde er schon reden.*
- ⑦*Unmöglich. Sie sei bestimmt beleidigt.*

(Wölfel, 1997 : Garten : 69)

なぜ、作者は改訂にあたり、接続法 1 式を接続法 2 式に変更したのであろうか？この問題に答えるための確かな糸口は、ほかでもない、語り手（高い蓋然性で背後にいる作者も）の作中人物（少年 Joschi および母親）、それぞれへの心的距離のありようの違いにこそある。

(18)⑥は接続法 1 式 (wolle) による典型的間接話法である。では、(19)⑥の接続法 2 式 (würde) は何か？ Herdin (1905) が示したように、推量・未来の助動詞 werden は、直説法過去形を持たないので、体験話法には接続法 2 式 würde を代わりに用いる。つまり形は接続法 2 式でも、働きは、直説法過去なのである。したがって⑥は体験話法である。かくして、「なぜ作者は、間接話法を体験話法に変更したのか？」という問題に煮詰められる。答えを究明するために、テキスト全体の状況の要点だけをか

いつまんでたどってみよう。①語り手の視点からの地の文であるが、最後の間接疑問文に、通常は付かないはずの疑問符が付されている。語り手が、Joschi の視点に近づきつつあることがわかる。②想定される元の発話（の一部）をそのまま再現した自由直接話法（または体験話法）と捉えられる。発話の主体は Joschi であり、母親ではない。③Nein や直示詞 das, jetzt など、かなり母親寄りの視点からの表現ではあるが、接続法 1 式が使われているので、やはりまだ間接話法である。語り手が母親に対しては Joschi に対するよりも若干距離をおいていること（Distanziertheit）が見てとれる。④Joschi の発言再現の体験話法である。直説法でなく接続法 2 式が使われているのは、想定されるもとの発話 „Aber ich möchte doch so gern!“ の中の接続法がそのまま体験話法に取り込まれるからである。⑤母親の元の発話（の一部）をそのまま再現した自由直接話法（または体験話法）と捉えられる。⑥上述の理由で体験話法、Joschi の発言の再現。⑦Unmöglich, bestimmt, どちらも、思う主体は母親である。母親寄りの視点ではあるが、後半の文の定形は接続法 1 式なので、伝達詞欠如の間接話法である。煎じ詰めて言えば、②、⑤でこそ、両者の発言再現に平等に自由直接話法が使われているものの、それ以外は、語り手は、両者への心的距離の差異を体験話法 vs. 間接話法という対立で言語的に反映させているわけである。これまでの観察から、上の問題は以下のように説明できる。

- I. 当該作品全編を通じて、語り手は主人公 Joschi 寄りの視点をとっている。端的にいえば、母親よりも Joschi に心的に近い。
- II. 心的に近い Joschi の発言である⑥には、間接話法（→wolle）よりも体験話法（→würde）が適する。

3. 翻訳の観点から

体験話法はこれまで繰り返し見てきたように、視点の作中人物への接近、視点的一体化により、本来、外からは窺い知ることのできない作中人物の内面、意識の流れを、同時・共同体験的に描写できるという特性を持っている。また、語り手の視点は作中人物への心的距離のありようにより、語り手（→間接話法）と作中人物（→自由直接話法）を両極点とするスカーラ上を動くので、それに応じ体験話法にもさまざまな変異形（Variante）が生じることになる。以上のことを「翻訳」の観点から言い直すと、語り手の視点が作中人物に近ければ近いほど、想定される直接話法に近く訳し、逆に、

スカーラ上を語り手の視点が作中人物から離れるにつれて、間接話法的に心理・感情などを濾過して平静・中立な文体で翻訳することになる。また、ここで詳細に立入る余裕はないが、前節の注 20 では、(自由) 直接話法でも、「発言」の再現か「思考」の再現かで女性ことばの再現の度合いに差があることを示唆的に述べた。ここではまずドイツ語の体験話法の日本語への「翻訳」の大筋を浮き彫りにするためのお膳立てとして、比較的短いテキストに三つの話法が現れている例を見てみよう。三瓶 (1996a: 48f.) からの再録である。

- (20) ①そして肝心の巴絵の質問にはなぜか——一言も答えぬのである。②(かくしているんだわ……この人) ③さすがに巴絵は怪しい疑惑にふとかられて、④(なぜこの話題になると話を避けようとするのかしら) ⑤そしてしばらくの間、巴絵は食事をするのをやめて相手をじっとうかがった。⑥好奇心とも疑惑ともつかぬ気持ちが彼女の胸にうずきはじめた。⑦この男は本当になに者なのだろう。⑧デクノボウのような彼は一体、男性的感情というもの——たとえば女性に対して心をひかれたり、情熱を持ったことなどが過去にあったのだろうか。⑨「ねえ、ガストンさんには恋人がいらっしゃるの」(遠藤, おバカさん: 227)

①は語り手が主体の地の文だが、「なぜか」と思う主体が作中人物の巴絵であることは、後に巴絵の思考・意識の描写が続くことを読者に予想させる。②、④は作中人物巴絵の思考をそのまま繰り返した自由直接話法である。注目すべきは②「だわ」、④「かしら」のように、「女性ことば」をそのまま繰り返していることである。③、⑤、⑥は地の文。⑦、⑧は体験話法である。⑦「この男、本当に、なのだろう」⑧「だろうか」などいずれも作中人物巴絵の内なる意識の表出である。このような内的意識の描写が可能なのは、語り手が視点を作中人物に近づけて、作中人物の意識をいわば共に体験しているからこそ可能なのである。さて、ここで検討すべきは、自由直接話法と体験話法のどこが異なるかという点である。共通なのは、指示詞、心的態度の発露の主体が語り手でなく作中人物だということである。すなわち語り手が、作中人物の視点から作中人物の内なる意識、作中世界を描いていることを示している。すると自由直接話法と体験話法の違いは「女性ことば(かしら、だわ)」対「男性色も女性色もない中立のことばづかい」という対立に煮詰められる。このことの自然な帰結として、自由直接話法は語り手が作中人物に完全に一体化しているために「生のままの意識・思考」を再現するのに対し、体験話法では、語り手の視点もある程度は保持しているので間接話法性も残り、たとえば「女性ことば」は濾過されるという推論が成り立つ。

裏返して言えば、体験話法では、女性の作中人物の思考・意識の流れはオリジナルよりも中性化、間接話法化されることになる。⑧の体験話法部の「彼」という代名詞も体験話法が帯びている間接話法性の傍証となろう。なお、すでに注 20 で述べたように、作中人物が女性の場合、(自由) 直接話法による「発話」の再現には「女性ことば」が多いが、「思考」の再現は、年齢、性格、内容などさまざまな条件により一概には言えない。「ふつう体」を用いることも稀ではない。十全な解明のためには認知心理学的な調査も必要であろう。

それではドイツ語の翻訳を見てみよう。ケストナーの「点子ちゃんとアントン」の一節。アントンが学校から帰ってくると、病気の母親がもう昼食を作ってくれていた。しかも、ご馳走だ。しかし食事中に母親はだんだんふさぎこんで、不機嫌になってきた。どうしてだろうか？ アントンは困惑してしまう……。

- (21) ①Schließlich hielt er das nicht mehr aus. ②„Muttchen, habe ich nicht gefolgt? Manchmal weiß man das selber nicht... Oder ist es wegen des Geldes? Die Würstchen waren eigentlich gar nicht nötig.“ ③Er legte seine Hand zärtlich auf ihre. ④Doch die Mutter trug rasch das Geschirr in die Küche. ⑤Dann kam sie zurück und sagte: ⑥„Fang immer mit Schularbeiten an. Ich komme gleich wieder.“ ⑦Er saß auf seinem Stuhl und schüttelte den Kopf. ⑧Was hatte er denn angestellt. ⑨Draußen schlug die Korridortür. (Kästner, Pünktchen: 87f.)

①とうとう、アントンがしんぼうしきれなくなった。②「母さん、ぼく、いい子じゃなかったの？ 気がつかないで、そういうこと、よくあるから……それとも、お金のこと？ ソーセージなんてなくなつて、ぼく、ぜんぜんかまわなかったのに」③アントンは、母さんの手に、やさしく自分の手をかさねた。④ところが、母さんはそそくさとお皿をキッチンにさげた。そして、もどってきて、言った。⑥「宿題をなさい。すぐにもどるわ」⑦アントンは、いすにすわったまま、悲しげに首を横にふった。⑧ぼくがなにをしたっていうんだらう。⑨外で、廊下のドアがぱたんと閉じる音がした。(池田訳, 111f.)

②は直接話法、⑧は体験話法である。想定される元の思考は Was habe ich denn angestellt? であろう。②の直接話法と同じく「ぼく」という「男の子ことば」による翻訳だが、文末は「であろう」と「ふつう体」⁽²⁴⁾になっている。体験話法の若干の距離

感 (Distanziertheit) の反映として「ふつう体」は適切な訳だと思う。なお、②の直接話法中の Muttchen, ③, ④の地の文中の ihre, Mutter はいずれも「母さん」と訳されている。大人向きの本だったら、直接話法 Muttchen vs. 地の文 Mutter の差異を反映させて、③, ④の地の文では「母親」と訳すであろう。

次の例では、二人の作中人物、ケルナー夫人と娘ルイーゼ、それぞれの内心の動きが体験話法により巧みにテキストに織り込まれている。伝達詞 (sagen, denken など) や引用符による中断もなく、読者はほとんど無意識に二人の意識を共体験することになる。

- (22) ①Endlich hat sie (=Frau Körner) im Dauerlauf Bahnsteig 16 erreicht. ②Der Bahnsteig ist leer. ③Nein! Ganz, ganz hinten sitzt ein Kind auf einem Koffer! ④Die junge Frau rast wie die Feuerwehr den Bahnsteig entlang! ⑤Einem kleinen Mädchen, das auf einem Koffer hockt, zittern die Knie. ⑥Ein ungeahntes Gefühl ergreift das Kinderherz. ⑦Diese junge, glückstrahlende, diese wirkliche, wirbelnde, lebendige Frau ist ja die Mutter! (Kästner, Lottchen: 55)

①やっとマラソンでプラットフォーム十六番にたどりつきました。②プラットフォームはからっぽです。③ではありません! ずっとうしろのほうに子どもがひとり、トランクにこしかけています。④若い夫人は消防隊のようにプラットフォームを突進します! ⑤トランクの上にうずくまっている小さい少女はひざがふるえます。⑥思いがけなかった気もちが子どもの心をとらえます。⑦この若い、幸福にかがやいている、夢やそらごとでない、うずまくような、生き生きとしている女の人がおかあさんなのですから! (高橋訳, ふたりのロツテ: 65f.)

①は地の文である。②, ③と⑦が体験話法と認定できる。②, ③はケルナー夫人の意識の再現, ⑦は娘ルイーゼの意識の再現である。地の文が現在時制を基礎としているので、体験話法と自由直接話法との区別は流動的である。自由直接話法に近いので、想定される元の思考にできるだけ近く訳すことを試みると次のようになる: ②ホームには誰もいない。③ちがった! ずっとずっとむこうに子どもがひとりトランクに座ってる! ⑦この若くて、幸せそうな、この夢じゃない、くるくる踊るような、元気一杯の女の人がおかあさんなんだ!

4. 結語

本稿の目的は、冒頭にも述べたように、子ども向きの本にも、大人向きの本と同様に体験話法が用いられていることを観察するとともに、体験話法の読者に及ぼす作用、翻訳の大筋を探ることであった。紙幅の都合で、間口は広げずに、少数の作品の体験話法の特徴・働き、翻訳の基本的な構図を素描することにとどめた。そして、語り手が視点を作中人物に近づけ、本来外からは窺い知れない作中人物の意識・心理のありようを、地の文との段差のない体験話法に織り込み、読者をして、地の文を読んでいくうちに半ば無意識に作中人物の意識の流れを同時・共同体験させる仕組みを浮き彫りにした。

ケストナーは大人向きの本、例えばファービアンにも子ども向きの作品にも体験話法を用いている。また 60 年代後半から始まった一連のアンチ・メルヒェンの路線上にある作品群には、多くの体験話法が用いられている。これらの作品の体験話法研究は今後の課題である。また広くドイツ語と日本語の体験話法を解明するためには、日本語の小説の独訳、逆に、ドイツ語の小説の日本語訳を分析することで、両言語に双方向の光を与えることになり、それぞれの特徴と機能を浮き彫りにすることが可能になるという確かな見込みがあるが、今はこのことを言い添えるにとどめる。稿を改めねばならない。

注

- * 本稿をまとめるにあたり、鈴木康志氏（愛知大学）に、多くの貴重な御教示を頂いた。この場を借りて深く感謝申し上げます。言うまでもなく本稿に存する不備、誤りはすべて筆者、私に帰する。
1. 本稿の主眼は子どもの本における体験話法の使用にあるので、ノンフィクションは考察の対象としない。ノンフィクションにおける体験話法については鈴木（1988）参照。
 2. Engelen (1995) は、子ども向きの本ではもっぱら直接話法が用いられていることを統計的に示している。
 3. 体験話法により、読者が作中人物の意識・心理を共同体験する仕組みについては三瓶（1996a）、Mikame（1996b）参照。
 4. ドイツの子どもの本の歴史について例えば Wild (1990)、吉原（1999）参照。
 5. 語り手でなく、作中人物が他の作中人物の発言を引用する場合は珍しくない。
 6. Weinrich (1985)、Thieroff (1992) 参照。

7. おそらく、自明のこととして言及されることがないのであろうが、地の文は語り手の立場・視点からの描写である。
8. 語り手が事件を物語りに「編集」する行為について田口（1993）参照。なお厳密には、「直接話法」も語り手によって「編集」されている。このことについて Fluderhik（1993）参照。
9. 紙面節約のため、例文出典の作品名は略記する。また、一部、再録の例文もあるが、初出の箇所をその都度挙げることは省いた。なお以下、体験話法、間接話法など、それぞれ当該の箇所はイタリックとする。
10. 後述するが、語り手と作中人物との間の心的・認知的距離が短くなるにつれて直接話法性が増す、すなわち変換が漸減し、間接話法にもさまざまな変異形 (Variante) が出現することになる。
11. 主節現象との関連で Mikame（1986）参照。なお心的距離が縮まるにつれて語順の自由度は高まる。
12. sagen, denken などの動詞から自由という意味である。フランス語では体験話法という名称でなく「自由間接話法 (style indirect libre)」という名称を使う。混同を避けるために自由間接話法という名称は用いない。
13. Steinberg（1971）、保坂（1985）、鈴木（2003）、神田（2004）など参照。
14. 想定（前提）される直接話法について、神田（2004）参照、特に第1章6。本稿の枠内では理論的妥当性の議論には立入らない。
15. Weinrich（1985）参照。但し、時制の変換は義務的ではない。地の文が現在ならば体験話法も現在時制となりうる。この関連で保坂（1985：198）も参照。
16. 但し、個別言語的な差異は存在する（例えば、男・女ことばの区別、大人・子どもことばの区別、丁寧体・普通体の区別など）。
17. Pascal（1977）参照。また神田（2004）、Vogt（1990）も参照。
18. 厳密には視点が「完全に」一致するのではなく、「部分的な」一致である。語り手の視点は語り手の基準点と作中人物を両極とするスカーラを行き来するが、作中人物の極点に近づいた状況である。
19. Herdin（1905）、Steinberg（1971）参照。
20. 作中人物が女性の場合、（自由）直接話法による「発話」の再現には「女性ことば」が多いが、「思考」の再現は、年齢、性格、内容などさまざまな条件により一概には言えない。但し、例文②③参照。なお体験話法の場合は、女性ことばは濾過されるのが普通である。
21. Mikame（1996b）参照。
22. Ehlich（1985）は、Eichendorf の作品を素材に、直示表現が読者の視点を作中世界に誘導、読者を作中世界に引き入れることを述べている。また Bethke（1990）も、指示詞が読者を作中人物に情緒的に近づけ、感情移入させることを指摘している。
23. 指示詞の意味・機能について三瓶（2002）参照。
24. 砂川（1986）参照。

例文出典

遠藤周作「おバカさん」角川書店, 1988。

Kästner, Erich: Das fliegende Klassenzimmer. Hamburg: Cecile Dressler Verlag, 149. Aufl. 1992.

Kästner, Erich: Pünktchen und Anton. Hamburg: Cecile Dressler Verlag, 111. Aufl. 1991.

ケストナー, エーリヒ「点子ちゃんとアントン」池田香代子訳, 岩波書店, 2002。

Kästner, Erich: Das doppelte Lottchen. Hamburg: Cecile Dressler Verlag, 142. Aufl. 1992.

ケストナー, エーリヒ「ふたりのロッテ」高橋健二訳, 岩波書店, 1992。

Nöstlinger, Christine: Oh, du Hölle! Weinheim und Basel: Beltz, 1999.

Pausewang, Gudrun: Ich geb dir noch eine Chance, Gott! Ravensburg: Ravensburger Buchverlag, 1997.

Wölfel, Ursula: Der rote Rächer. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag, 1996.

Wölfel, Ursula: Joschis Garten. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag, 1972.

Wölfel, Ursula: Joschis Garten. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag, 1997.

参考文献

Bethke, Inge (1990): *der die das* als Pronomen. München.

Ehlich, Konrad (1985): Literarische Landschaft und deiktische Prozedur: Eichendorff. In: Schweizer, Harro (Hrsg.): Sprache und Raum: Psychologische und linguistische Aspekte der Aneignung und Verarbeitung von Räumlichkeit. Stuttgart, 246-261.

Engelen, Bernhard (1995): Überlegungen und Untersuchungen zur Syntax im Kinderbuch. In: Angelika Feine/Karl-Ernst Sommerfeld (Hrsg.): Sprache und Stil in Texten für junge Leser. Festschrift für Hans-Joachim Siebert zum 65. Geburtstag. Frankfurt a.M., 43-63.

Fludernik, Monika (1993): The Fictions of Language and the Languages of Fiction. The linguistic representation of speech and consciousness. London/New York.

Herdin, Elis (1905): Studien über Bericht und indirekte Rede im modernen Deutsch, Dissertation. Uppsala.

保坂宗重 (1985): 「体験話法——その文法的形態について——」『ドイツ語学研究 I』東京クロノス, 191-220。

神田和恵 (2004): 「体験話法研究」博士論文 (2003)。

Mikame, Hirofumi (1986): Die Einstellung des Sprechers zur Komplementsatzproposi-

- tion und diesbezügliche syntaktische Phänomene bei Komplementsätzen mit *daß*. In: Deutsche Sprache 14, 323-337.
- 三瓶裕文 (1996a): 「日本語とドイツ語の体験話法について——間接話法と自由直接話法の間で——」『一橋論叢』第115巻第3号, 40-63。
- Mikame, Hirofumi (1996b): Markierte Perspektive, perspektivische Annäherung des Sprechers an das Objekt und direkte Wahrnehmung — Zur Signalisierung der psychisch-kognitiven Nähe des Sprechers zum Objekt —. In: Sprachwissenschaft 21, 367-420.
- 三瓶裕文 (2002): 「ドイツ語授業における「指示」の問題について」『エネルギー』27号, 92-111。
- Pascal, Roy (1977): The Dual Voice. Free Indirect Speech and its Functioning in the Nineteenth Century European Novel. Manchester.
- Steinberg, Günter (1971): Erlebte Rede. Ihre Eigenart und ihre Formen in neuerer deutscher, französischer und englischer Erzählliteratur. Göttingen.
- 鈴木康志 (1988): 「ノンフィクションにおける体験話法」(日本独文学会)『ドイツ文学』第80号, 80-91。
- 鈴木康志 (1992): 「体験話法の識別法について」(日本独文学会)『ドイツ文学』第88号, 77-88。
- 鈴木康志 (2003): 「思考・発言再現における人称の変換(I)——3人称小説・1人称小説・2人称小説の場合——」『愛知大学文学論叢』第127輯, 1-18。
- 砂川有里子 (1986): 「する・した・している」くろしお出版。
- 田口紀子 (1993): 「物語の言語分析——ナラトロジー」大橋保夫他著『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社, 293-312。
- Thieroff, Rolf (1992): Das finite Verb im Deutschen. Tempus — Modus — Distanz. Tübingen.
- Vogt, Jochen (1990): Aspekte erzählender Prosa. Eine Einführung in Erzähltechnik und Romantheorie, 7. Aufl. Opladen.
- Weinrich, Harald (*1985): Tempus. Besprochene und erzählte Welt. Stuttgart. (1. Aufl. 1964).
- Wild, Reiner (Hrsg.) (1990): Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur. Stuttgart.
- 吉原高志 (1999): 「子どもの本とアンチ・メルヘン」(日本独文学会)『ドイツ文学』第102号, 74-84。